



砂の器

紀州

熊野古道 小辺路

佐藤(耕)

【日時】 2008年10月12日(日)～10月14日(火) 佐藤(耕)(単独)

07年、大峰奥駈を一気に果たさんと、奈良・十津川村と和歌山・本宮町の境の玉置山に至らんと十津川を眼下に、その向こうの山塊を見ていた時のことである。再び、この三千六百峰を訪ねる予感があった。吉野から熊野に至るその西に、高野山から熊野に至る小辺路(こへじ)、別名を高野街道という古道が山を縫っている。

小辺路は大坂方面から最短距離で熊野に至るルートで、強引といえるほど南東一直線に伸びており、世界遺産のおかげか導標がやたら多いだけでなく、その方向に向かっていれば、ひとまずは安心。それでも1,000mの峰や峠を3つ越さなければならず、全行程72kmあるというが、奥の細道に芭蕉に随行した曾良は、普通3泊のところを2泊で達したというから、このたびは曾良に倣おうという計画である。

伊勢を経由したり、紀伊半島西の海岸線を廻ってという、熊野への時間も金の余裕もない大阪周辺の庶民の辿った道が小辺路といわれる。大峰奥駈は名だたる山稜を結び、七十五摩(なびき)という行場を巡る「聖なる道」なのに対し、吊天井で客を殺して路銀を奪った宿の長者伝説まで伝わる小辺路は「俗の道」ともいえよう。

京都への出張が押し、前日の晩に、橋本や高野山入りは出来なくなった。翌朝、南海電鉄で橋本から入ろうと、大阪環状線・新今宮のホームに立っていた。阪本順治監督の「王手」のワンシーンで印象的な通天閣のネオンを見ながら、ザックを背負って降りたところは、あいりん地区の職案近くだった。

1泊2,000円のドヤ(あとで知ったが、これで最上級クラスだそう)に泊まり、日曜というのに早朝から賑わうあいりん地区をあとにして山入りしたこともあり、庶民の道・小辺路の印象はリアルなほどに強かった。それだけに「蟻の熊野詣」といわれるほど、なぜ人は熊野をめざしたか、山行中それがずっと気になっていた。

「……熊野路には人生の宿業の重荷を背負った道者、巡礼者が多数往来していたものとかんがえている。長谷・石山の物語ならいざしらず、熊野詣は物見遊山や酔狂ではどうていできなかつたのである」とは、五来重の「熊野詣 三山信仰と文化(講談社学術文庫)」の一節である。

その「小栗街道」で説かれるのは小栗判官・照手姫の物語だが、私はこの話は、臺坂靈驗記のお里・沢市と同じぐらいに思っていた。ともに蘇生するにせよ、沢市は眼が見えるようになるのに対し、小栗判官は「餓鬼阿弥」として蘇生する。餓鬼阿弥とは「がきやみ」。実は現在では、これを「真正面から取り上げて解説しにくい」ため、熊野に託した人の思いが伝わらないのであろう。

五来重の「熊野詣」は1967年の初出であるが、60年初頭に、実は「がきやみと巡礼」をドラマの基軸にした長編小説が、世に出たことを思い出してみよう。松本清張の「砂の器」である。最近、テレビでリメイクされたが、「がきやみと巡礼」の設定はさすがにできなかつた。しかし映画のほうをご覧になった方は多いと思う。

映画では「がきやみ」が「人生の宿業の重荷を背負った道者、巡礼者」とならね

<http://www.tomanokaze.dojin.com/>



ばならなかった悲しい社会と人生を描いている。そこからして、熊野とは何かが見えてくる。熊野とは、不浄をも厭わぬ蘇生の地であり、人々はそれを救済として小辺路をも歩んだのではないだろうか。

そういえば「砂の器」では、犯人が浮かび上がる地が熊野の入り口の伊勢の映画館。犯人が戸籍を偽るのが通天閣付近の役所というのも、なんとも象徴的ではないか。というより、人の世のなにをか知っているのであろう。松本清張、おそるべし。

さて、肝心な山行である。高野山から薄峠の間にすれ違った軽トラは、キノコを抱えていた。なるほど、その先のアカマツ林にはロープが張ってあった。

大滝の登り口の人家にはトイレがあり、登山者を迎える用意がしてあるのはうれしい。水をいただきがてら家のおじさんと話をすれば、伯母子山は行けそうだ。

明るいアカマツの山道も、その先は高野山スカイラインに縦断され、山道に入ってはまた舗装道と、霊山の高野山域といえど、月山と同じで古道が断続している。

大股で川筋まで降りて伯母子山へと登りはじめるが、ダルが憑いたか歩みが進まない。ここが行程中で最も急勾配だったらしく、紅葉のはじまった落葉樹の中を登りつめると伯母子山頂だった。同定はできないが、全周は山の海である。それでも熊野ではなく、まだ奈良県を辿っている。伯母子峠の避難小屋はきれいであった。

翌朝、まだ暗いうちに発つ。しっかりした道を三浦へ下り、バス停の登山口へ。吊橋を渡ると、奥武蔵のユガテかというような人家の間を縫う道に、初めて見る「はぎ掛け」があった。石を敷いた道をつづら折りに登れば、植林の中に樹齢500年といわれる杉の巨木が異形を誇っている。三浦峠からは、ひたすら下る。途中に樹林の間から山間地の今西集落を望める場所もあるが、かくも人は山に生きていた。里に下れば廃屋もあったが、西中あたりでは休日ということもあって、子どもから若者、年寄りの姿も見えて、熊野の生活が垣間見られたのはうれしい。十津川は温泉地で広いが、果無峠へは「ホテル昴」が近く、3連休最後の日なので空気があった。

果無の集落は、ケイトウなど秋の花に深く彩られていた。朝まだ早いのが、おばあちゃんたちが庭先で仕事をしていて、暮らしの匂いがする。越えてきた小辺路の山中の宿はことごとく跡となっていただけに、山里が息づいているのがうれしい。

予報では100%の雨は果無峠でこらえ切れなくなって雨具をまとう。下れば、熊野は雨にけぶっていた。道の駅・奥熊野古道ほんぐうで、伏拝王子経由の「中辺路」を経由して本宮大社へと向かっていった。

- 【行程】 10/12 高野山金剛三昧院入口(8:50)～大滝(10:10)～水ヶ峰分岐(11:00)～大股バス停(12:40)～伯母子山頂(14:45)～伯母子峠避難小屋(15:30)
- 10/13 伯母子峠避難小屋(5:00)～三浦口バス停(7:35)～三浦峠(9:10)～西中大谷橋バス停(10:55)～十津川(13:20)
- 10/14 十津川(5:55)～果無集落(6:30)～果無峠(8:00)～八木尾バス停(9:25)～伏拝王子(10:25)～熊野本宮大社(11:15)

【地形図】 高野山・梁瀬・上垣内・伯母子岳・風屋・十津川温泉・伏拝